

南嶽慧思の禪觀

仙 石 景 章

慧思（五一五—五七七）が立てた「誓願入山学神仙、得長命力求仏道」（立誓願文、T四六一七九一下）の誓願は、当時の不穩な社会情勢や四度の法難などとともに、南嶽入山の動機を構成する。本論では、その入山前後の事情を『立誓願文』、『南嶽総勝集』などの文献を参照しつつ考えてみたい。

『立誓願文』は、慧思の行動と思想を知るための基本資料である。この願文が作られたのは、慧思が四十四歳（一説に四十五歳）の時、智顗の大蘇山歴訪以前に当る。『願文』には、弥勒への信仰、神仙長寿への願望が見受けられる。これはまた南嶽入山の大きな契機ともなったと考えられる。『立誓願文』に「我今誓願持令不滅、教化衆生至弥勒仏出、仏從癸酉年入涅槃後、至未來賢劫初、弥勒成仏時有五十六億万歳、我從末法初始立大誓願、修習苦行、如是過五十六億万歳、必願具足仏道功德見弥勒仏、如願中說」（七八六下）とあるように、慧思には弥勒への熱烈な願求心があった。弥勒・弥陀の往生思想は、後漢代より南北朝時代に至る幾多の浄土

經典が訳出され、仏教徒の間へ徐々に浸透していくが、なかでも慧遠の白蓮社念仏、曇鸞（四七六—五四二？）の弥陀浄土思想、傳大士の弥勒信仰などが顕著である。

慧思においては、弥勒信仰と不老長生法とが密接な関連を持っている。曇鸞が、不老長生を求めて陶弘景から神仙長寿の法を受け、後に菩提流支の無量寿仏についての教示を転機として専ら浄土教に傾倒していったのと趣きを異にする。慧思のそれは、「至弥勒出世、化衆生不絶、誓於此生作、長寿五通仙、修習諸禪定、（中略）以此求道誓願力、作長寿仙見弥勒」（七九一下）とあるように弥勒仏にまみえんがためである。長寿の具体的方法は明らかではないが、『願文』には「願諸賢聖佐助我、得好芝草及神丹、療治衆病除饑渴、常得經行修禪定、願得深山寂靜處、足神丹藥修此願、藉外丹力修内丹、欲安衆生先自安」（七九一下）とある。慧思の長寿法は、自身一人の延命や昇天を目的とするものではなく、弥勒竜華三会に遭うことを期し（統高僧伝卷十七、T五〇—五六二下）、衆生

教化を目的とするものである。

この誓願を立てたのが、南岳入山の約十年前のことである。慧思も、南嶽が道教の聖地であることを知っていたであろう。太蘇山を出立して南嶽へ入ったのは、陳・斉における紛争、悪論師による毒害に遭い、年来の末法到来の自覚がいよいよ確かなものとなったためであり、また南嶽が入道の山であり、前に示した誓願の実践にふさわしい霊場と考えた（統高僧伝卷十七、五六三上）からであろう。慧思が南嶽へ入る時期は、『統高僧伝』『天台九祖伝』などによれば、陳光大二年（五六八）である。南嶽に於ける事跡は、諸種の史伝類にも散見されるが、未だ判然としないところがある。そこで、地誌である『南嶽総勝集』の慧思に関する記述を抽出し、従来の伝記資料と対照してみたい。

先ず、『天台九祖伝』によれば、入山して恵海なる人物に会い、旧識の如くであったといわれる。南嶽在住の高僧であったのであろう。『南嶽総勝集』には、「昔高僧希通遊南嶽、遍尋方広寺、訪慧海尊者」（T五一—一〇六一中）とあり、希通も恵海を訪ねている。恵海は衡嶽寺にいたといわれる。『総勝集』巻中には「〔衡嶽禪寺〕在廟西北一里集賢峯下、梁天監二年建恵海尊者道場、至本朝太平興國年、勅以旧額爲賜寺、後有善果庵、及海棲禪師宴息之所」（一〇七〇上）とあるが、後に告成禪寺と改められ、「思大和尚感鬼爲之磨香、

今山中有兜婁香、蓋遺植焉」（一〇七〇上）とあり、寺前には、唐の李異が撰した般若・南台・万寿・華嚴・弥陀の五寺の碑があるとされる。

『総勝集』には、海印という人物が、慧思の入山直後に会見していると伝える。巻上に「梁高僧海印大師者、首居衡山最上第一、推較年代即大同天監之前、宜与達磨相接、而爲可公時輩其居所、謂善果道場也。（中略）陳光大初、恵思和尚始自北来詣大師忻然合契、由是上石橋創創菴舍、高而在南、故号南台」（一〇六七中）とある。海印や慧思が庵を結んだ南台とは、「在廟之北登山十里」（一〇七〇中）とあり、石頭希遷ゆかりの地でもある。

次に『統高僧伝』には、「即至告曰、吾寄此山正當十載、過此已後必事遠遊、又曰、吾前世時曾履此處、巡至衡陽值一佳所、林泉疎淨見者悦心、思曰此古寺也」（五六三中）とあり、『総勝集』巻上には「曰吾寄此當十年、因建般若台居之」（一〇六七下）とあるが、般若台とは般若寺ともいい、福嚴寺のことである。『総勝集』巻中に、「〔福嚴禪寺〕在廟之北登山十五里、岳中禪刹之第一、陳太初（太建カ）中、恵思和尚自大蘇山領衆来此、建立道場、師常化人、修法華、般若、念仏三昧、方等懺悔、因号般若寺、□本朝太平興國中、改賜今額、有唐懷讓禪師、結菴于思之故基」（一〇七〇下）とある。ここはまた観音台といわれる。懷讓が一般に観音大師と称せられ

るが、觀音台の名もここから起ったといわれ、宋代になって般若寺は福嚴寺に改められた。後晋の曹州扈通院の智朗は、この般若寺に住して胎息術を修めたと伝えられる（宋伝卷二十八号）。

慧思は、南嶽在山中に道士たちからも迫害を受けた。九仙觀の道士歐陽正則の徒が、慧思を嫉み、皇帝に誣奏して、齊のために謀りごとをめぐらしたと告げた。この伝は、『仏祖統紀』卷六（T四九一・一八〇上）に詳しいが、南嶽が道士の靈場としての歴史を持ち、道教の伝統が支配していたとすれば、慧思とその集団の間に行なわれた北方の禪法が、彼らには異質なものに映ったであろうことは想像される。九仙觀とは九仙宮のことである。『総勝集』卷中に、「在廟東十二里、梁天監中建、昔王処與自中宮煉行、既周冲寂、後遷於此、（中略）置上中下三宮以修内外丹」（一〇七五上・下）とあり、『南岳小録』には、「九仙宮、本張真人、名始修所居、有石壇方闕丈余、梁天監三年、有仙者八人、迎張真人、於石壇上、同昇天去、感通九年、衡州刺史史觀置官額、十年十月勅下宜依所奉行之」とある。また『南岳九真人伝』は、この九仙宮において、晋宋齊梁代に昇天した真人の記録である。

他に、『総勝集』には、擲鉢峯、会善峯会善寺、大明寺、光天觀などの寺觀における慧思の事跡が記述されているが、特に会善寺については、『総勝集』卷中に「嶽之西南九十里、

迺晋咸和年重理旧寺、及嶽中十八高僧禪会之所」（一〇七七下）とある。十八高僧とは、慧思、惠海、智顗、大善、僧照、惠成、大明、惠勇、惠稠、惠誠、惠宣、善伏、曇楷、義本、義顗、悟実、道倫、智明である。唐の惠日は『南岳十八高僧伝』を撰したが、現存しない。因みに、後唐の南嶽般舟道場の惟勤や黄門侍郎盧蔵用もまた「南嶽高僧伝」を著わしている。

前に述べたように、慧思は、内的外的要因によって南嶽へ入った。北地の世情の不安定なことや悪論師による受難が重なり、末法の世に身を置かねばならない宗教者の苦悩は、弥勒の下生への希求に転化されていったと考えられる。弥勒との遭遇には、自身の延命を果さなければならぬが、その要求を満たす方途として流行の道教の不老長生の法に、慧思が目を向けたとしても不思議ではないであろう。南嶽入山には、神仙長寿の法を体得せんとする意図が蔵されていたとも言える。しかし、慧思の伝記や著作のなから、道教の思想を読み取ることが、難しい。入山後、慧思は、丹藥、芝草を服したかもしれないが、北地の禪定が、仏道実践の中心であったことにまちがいない。だからこそ南嶽の道士との抗争も伝えられるのであろう。しかし、仏教と道教との接点を持てた慧思という人物については、その教理的な部分をも含めて再検討する必要がある。